HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	有島武郎「死と其前後」論 ： 夫婦の愛をめぐって
Author(s)	中村, 建
Citation	研究論集, 22, 111（右）-123（右）
Issue Date	2023-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.22.r111
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87881
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_rjgshhs_22_p111-124_r.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.22.r 111

有島武郎「死と其前後」論
――夫婦の愛をめぐって――

中村　建

要旨

有島武郎の戯曲「死と其前後」は従来、作者自身及び病死した作者の妻に関する伝記的事実に大きく傾斜した研究が多くを占めている。また、この作品の解釈も前述の事実を踏まえた上で死に対する夫婦の愛の勝利といった見方が主流であり、テクストに即した研究が不足していると言わざるを得ない。

そこで本稿では、特に同時代においてなされた夫婦の「愛の勝利」という解釈が、近代日本におけるメーテルリンク受容と関わりのあったものであることを示すとともに、テクストに即して「愛の勝利」の内実を明らかにする。後年、「メーテルリンクの季節」と呼ばれた当時、三角関係を題材とした『アグラヴェーヌとセリセット』がしばしば話題され、有島も小説に引用し、「死と其前後」への評価でも引き合いに出されるほどであった。しかし当時の受容は、難解な戯曲の内実を深く理解していたものというよりも、戯曲というジャンルが運命や人の内面を直感的に表現できるという一種の神秘主義的なものであり、そのような文脈の中で「死と其前後」も受容されたのであった。

次に、夫婦の愛について戯曲のテクストに即して分析を試みる。この戯曲は「愛の勝利」として評価されてきた一方、その愛について否定的な評価も根強い。筆者はこれを愛を相対化する回路として評価しつつ、有島の「恋愛の多角性」の主張との関連から考察を試みる。有島は晩年、同時に複数の人物に恋愛するという「恋愛の多角性」を唱えていた。劇中、何人もの女性に誘惑を感じてきたことを告白する夫は、そのような有島の後年の主張を予期させるものである。また、夫からの愛を疑う瀕死の妻へのそのような夫の告白は、妻との愛を確認しつつもその愛の不可能性を露呈するものである。

以上の内容から、「死と其前後」における愛の勝利と不可能性は、有島が自己と他者の同化を唱えた一方で認識を自己批判するような晩年への変遷を予見させるものであると言える。

はじめに

有島武郎「死と其前後」は、序幕と第一場から第五場、終幕の全七場からなる戯曲である。大正六年五月『新公論』に発表され、若干の改稿の後、有島武郎著作集第一輯『死』（大六・一〇、新潮社）に収録された（なお、本稿では単行本の本文を使用する）。演劇としては大正七年一〇月三～七日、秋田雨雀の提案により、島村抱月演出・松井須磨子主演の芸術座によって初演され[1]、令和期にも再演される[2]など有島の代表的な戯曲の一つである。

「死と其前後」の梗概は以下の通りである。序幕で擬人化された「死」が一人の人物の死を予言したのち、結核に冒された妻・A子と彼女を看病する夫の声が聞こえてくる。第一場は午後一〇時、「海岸保養別荘」に医師が回診し、夫に妻の容態が悪いことを告げる。死を覚悟した妻は夫に、手帳に遺書を書いておいたと伝える。第二場は妻の夢の中で、新婚の夫婦が札幌に住んでいた時期の夏の場面である。社会主義の集会の件で大学講師の夫は警察に拘束され、学生からは有夫の女性との関係を疑われて退職を迫られ、妻が夫の潔白を訴えようとするところで幕を閉じる。第三場は現実に戻り、第一場から数時間後の未明となる。容態の悪化した妻に夫は、かつて他の女性に心を牽かれたものの、その誘惑に打ち勝ってきたことを告白し、夫婦は互いの愛を確認する。第四場は再び妻の夢となり、第二場から数年後の札幌の冬の場面となる。夫は大学を辞して農業をしており、子供も三人になっている。遺書を書いたという夫の父からの郵便をきっかけに、妻は手帳を取り出して遺書を読み上げて夫に別れを告げる。第五場は第三場から数時間後の午前七時で、妻が息を引き取る。終幕では「死」が、夫の父親もまもなく死ぬであろうことを告げる。

この妻・A子のモデルが、大正五年八月に亡くなった作者の妻・安子であることや、夫婦間の危機、札幌での講師時代の有島が教会から退会したこと、有島自身が書いたとされる年譜に「危険人物として北海道庁から監視を受けた」（「文壇諸家年譜（26）」、『新潮』大七・三）とあることなどが作品に反映されており、この戯曲は自伝的な要素が強いものとなっている（ただし、警察による拘束や大学からの追放などはフィクションである）[3]。また、有島自身が執筆の動機について、妻の遺稿集『松むし』（大五・九）を配布した際に「一つの創作的の構図が浮んで来てゐた」（「生と死の対立」、『早稲田文学』大七・七）と述べていることもあり[4]、従来の先行研究では妻安子との関係を中心に伝記的な観点から論じられることがほとんどであった。また、有島の吹田順助宛の書翰（大七・五・二〇付）のように、作者自身が「愛」の「不滅」を表現したかったと書いており、多くの同時代評や先行研究では肯定的なものも否定的なものも含めて、死に対する夫婦の愛の勝利という部分についての解釈が集中している[5]。このような従来の研究では、作家自身と妻の伝記的事実に大きく傾斜しており、テクストに即した研究が不足していると言

わざるを得ない。

そこで本稿では、特に同時代の「愛の勝利」という解釈が日本におけるメーテルリンク受容と関わりのあったものであることを明らかにする。また、夫婦の愛について、戯曲のテクストに即して分析を行いながら、従来指摘されていなかった有島の晩年の所謂「恋愛の多角性」の主張と劇中の夫との造型の関連についても触れる。最後に、この戯曲が一方では夫婦の愛の勝利を表現しつつ、他方では愛の不可能性を露呈していることを論じ、メーテルリンク受容を逆手にとった表現であったと結論づけたい。

一　大正期のメーテルリンク受容

明治二八年の上田敏による紹介以来、日本には「メーテルリンクの季節」と呼ばれるほど、モーリス・メーテルリンク（Maurice Maeterlinck、一八六二～一九四九）が流行した一時代があった。有島武郎の場合にはメーテルリンク受容に関する直接的な記述は少なく、『蜜蜂の生活』（*La Vie des abeilles*、一九〇一）を英訳（*Life of Bees*）で読んだという日記の記述（明四一・三・二〇及び二二）と、小説『宣言』（大四・七～一二）に戯曲『アグラヴェーヌとセリセット』を読む場面がある程度である。後で述べるように、神近市子もその「死と其前後」評で引き合いに出しているなど、同時代のメーテルリンクの流行においてしばしば『アグラヴェーヌとセリセット』が言及されている。

一方、有島の周辺の白樺派の武者小路実篤や志賀直哉らがメーテルリンクの影響を強く受けていたことは既に知られている。特に菊田茂男[6]や今村忠純[7]が論じているように、武者小路がトルストイから訣別した後「自己の力」を認識し、個々人の内部の生命が宇宙の大きな生命に繋がるという、所謂白樺派的な精神を持つに至る過程でメーテルリンクが果たした役割は大きいものであった。また、同じく白樺派の長与善郎はその回顧録で、武者小路がメーテルリンクの「運命」という概念の影響を受けていたことを述べた上で、自身もメーテルリンクの妻となった「アグラヴェーヌのモデルと思われるひとの写真を何かの雑誌から切り取って絵端書きにしたりした」[8]と書いているなど、その影響力の強さが窺える。なお、これはメーテルリンクが若い女優と恋に落ちて妻と離婚した後、一九一九年に彼女と再婚したことを踏まえての行動であり、後述の本間久雄も戯曲の解説の中で、このことについて触れている。

ここに登場する、『アグラヴェーヌとセリセット』と「運命」は同時期のメーテルリンク受容を象徴するものであるが、この五幕からなる象徴主義的な戯曲の概要は以下のとおりである。メリアンドルとその妻セリセットが住む城に、メリアンドルの兄の未亡人・アグラヴェーヌが訪れる。メリアンドルとアグラヴェーヌが親密になっていくのを知ったセリセットは二人のために塔から誤って転落したように見せかけて自殺し、幕を閉じる。

『アグラヴェーヌとセリセット』（*Aglavaine et Selysette*）は一八九六年に初演された後、一九〇一年に英訳（*Aglavaine and Selysette: a*

drama in five acts）され、一九一四（大正三）年一二月に秋田雨雀による日本語訳が出版されている。日本ではこの英訳や秋田訳によって受容されたと思われる。有島がどちらを読んだかは不明であるが、雨雀との交友関係が深かったことから、この和訳を読んでいた可能性が高い。

雨雀はこの翻訳の序で「私達は人生といふものゝ真生の姿、それは芸術の力を藉らずしては日常見ることの出来ない、その神秘を示してもらひたい」[9]と述べてメーテルリンクがそのような神秘を表現したことを示唆している。その「神秘」について、厨川白村は『近代文学十講』で、「人心秘奥」の神秘を表現するには小説よりも「文芸の形式としては最も複雑な戯曲」が適しているとした上で次のように述べている。

> その最もよい例はマアテルリンク作『アグラヴェインとセリセット』の如き物で、あれを見てゐるとわれ等自らもいつの間にやら spiritual region へ誘入れられ、そこに身を置いて心霊の交渉を見てゐるやうな気がする。勿論作者が一つの思想を、吾人に示さうといふのではなくて、寧ろ直感的に人心秘奥の神秘境を暗示しやうとするのである[10]。

このように白村は『アグラヴェーヌとセリセット』を始めとした戯曲に神秘性を見出した上で、人間の内部にある「心霊」と外部の現実世界とを繋ぐのが「運命」であり、その運命は不可視のものであると説いている。

その他、『アグラヴェーヌとセリセット』に関する解説としては少し時代は下るが、本間久雄は近代文学における男女の三角関係を描いた物語の解説において、「好意を持ち合つてゐる三人の間に、一人が死ななければならない悲劇を醸し出すといふところに、メエテルリンク一流の運命観が寓されてあります」[11]と述べている。また、楠山正雄は「恋愛が人間を死に導く宿命的な力でなく、光明と自由への飛躍であることが、セリセットの自由意志による楽しい犠牲的の死によつて証拠立てられた」[12]と解説している。勿論、これらの主張の妥当性や内実に疑問は残るが、『アグラヴェーヌとセリセット』に、「運命」や「死」を描出するテクストとして評価しているのが特徴的である。

以上の同時代の解説をまとめると、メーテルリンクの戯曲とりわけ『アグラヴェーヌとセリセット』は、運命や死に翻弄されながら生きる人間の、論理的には説明できないような心の内面を、戯曲という形式によって直感的に受けとることができるという、一種の神秘主義的な受容がなされていたと言える[13]。このような受容は、有島の『宣言』でこの戯曲が言及されている部分にも見て取れる。

> その頃、偶然、僕等はメターリンクの「アグラヴェーンとセリセット」の会読をした。僕がこの不思議な神秘の力を秘めた詩を読むのは三度で、Y子さんは始めてだつた。三度目に読んだ僕が驚いた如く、始めて読んだY子さんは驚いた。真裸かな運

命の真実が二人の前に投げ出された。

（BよりAへ、一九一四・二一・九）

ここでは、Y子とBが会読しているメーテルリンクの戯曲の三角関係が、Aの婚約者・Y子がBと結びつくという『宣言』の三角関係の伏線となっていることも重要であるが、「神秘」や「運命」といった受容の在り方が、白村ら同時代の理解を反映しており、有島も当時のメーテルリンク受容を踏まえていたことを示すものとなっている。

一方で、ここまで紹介したメーテルリンクや『アグラヴェーヌとセリセット』の受容においては、具体的にどのような思想を有する人物で、どのような内実をもった戯曲・テクストであるのかについては判然と述べず、抽象的な内容に終始しているきらいがある。実際、『アグラヴェーヌとセリセット』は現代の日本でも親しまれている『青い鳥』（一九〇八）のような戯曲とは異なり、登場人物達の台詞は難解であり、メリアンドルとアグラヴェーヌが親密になる過程もセリセットが自殺を決意するまでの行きがかりも、明瞭に描写されてはいない。先に挙げた筋も一読してすぐに理解できるようなものにはなっておらず、同時代の日本人がどれだけ『アグラヴェーヌとセリセット』を理解できていたのか、怪しい部分は残る。

しかし、内容の深い理解よりも戯曲という形式によって、「運命」に翻弄される人間を「直感的」に表現している、という受容の在り方を踏まえておくことが大切である。柳父章は、宝石がそれ自体ではなくそれを包む宝石箱（カセット）によって美しく見えるという比喩によって、近代日本の翻訳語がその言葉の本来の意味ではなく、外国から新しくもたらされた「ことばじたいの魅力」によってもてはやされるという「カセット効果」[14]を提唱している。メーテルリンクや『アグラヴェーヌとセリセット』の受容、そして次節で述べる「死と其前後」への解釈は翻訳語の使用というわけではないが、そのようなカセット効果によるものと言えるのではないだろうか。つまり、メーテルリンクの戯曲の内実よりも、海外の戯曲という外面の真新しさによって受容され、「死と其前後」もそれに類するものと見做されたのではないだろうか。また、同時代の青年が演劇の現実の舞台ではなくその奥の「幻影の舞台を夢みていた」[15]という越智治雄の指摘からも、そのような受容がなされていたことが分かる。

二　愛の勝利

さて、最初にも述べたように「死と其前後」への評価は、夫婦の愛に焦点が当てられてきた。まずは、同時代評から確認しておこう。「死と其前後」発表の前年に大杉栄を刺傷した神近市子は、望むべき恋愛・結婚の在り方は一夫一婦制であるとし、その望ましい例として「死と其前後」の夫を挙げ、『アグラヴェーヌとセリセット』に対して、他の女性への誘惑に打ち勝った前者を「より近代的なもの」[16]として評価している。また、和辻哲郎も「完全に一つにならうとする二つの心の全人格的な叫びである」[17]と、夫婦が愛によって一つ

になろうとする努力を絶賛している。さらに、実際の上演を観た藤沢清造は、脚本が「失敗」であるとしつつも、夫婦の愛については「此の世に於ける最も偉大なるもの」[18]と賞讃している。この他先行研究では、永平和雄[19]および藤木宏幸[20]が、妻の死という題材を、死の擬人化や現実と夢を平行して展開する様式という点から評価している。

一方、否定的な評価も根強く、同時代では江口渙が、作者の「自己の哲学」や「愛の教」を「布衍」・「宣伝」しようとしたために「読者が享受し得るものは、全然冷く硬化した愛の概念」[21]でしかないと酷評している。先行研究では井上理恵が、後にも引用するように戯曲の構成に欠点があるとした上で、妻に主体性がないために夫婦が「愛によって一体化できたのかどうか疑わし」[22]いと批判している。また佐々木さよは、有島の妻・安子の遺稿集『松むし』における彼女に比べて「死と其前後」のA子の方が、有島自身の経験が投影されたために「作り物という印象が拭えない」[23]と、あまり肯定的には評価していない。

確かに、他の女性への誘惑を振り切って妻への愛を告白する夫と、それに感謝する妻の姿から、「愛の勝利」を見て取ることができる。しかし同時に、死に瀕した妻にそのような内面の遍歴を語った上で愛を確認するという構成には不自然さが拭えないのも確かである。

では、その愛の内実はどのようなものだろうか。戯曲の展開に即して確認しよう。

第一場では、医師が夫に妻の「容態が非常に険悪」であることを伝え、二人は一年以上会わせていない子供達を連れてくるかどうか相談する。それを隠す夫に、妻は「もう虚言のつきつこはよしませうね」と言う。これは、妻の容態や子供達との面会といった表面上の問題のみならず、後から明らかになるように、夫からの愛を確認できないことに対する妻の疑念を示している。それに対して夫は「（感じたらしく）うむよさう…ほんとうだ」と答え、その後妻が話をしたいというのに対しても「然しお前は眠らなければ……（自分に気付き舌打ちして）俺れは何と云ふ間にあはせ屋だ。……さうだ。一晩中でも話をしよう」と夫婦間の問題に真剣に向き合おうとする。

第一場で提示された妻の疑念は、第二場の夢の中で象徴化された形で展開されることになる。ここで妻は、夫が以前心を寄せていたらしい女性となぜ結婚しなかったのかと問いただす。それをきっかけに、夫の教会からへの退会などをめぐって二人は口論する。そこに特高刑事が現れる。刑事は、夫が参加する予定の社会主義の集会についてしつこく質問する。それに答えない夫に対し刑事は、「あなたは白昼芸者屋だの料理屋に出入なさる相ですな」、「ある有夫の女と通じていらつしやる相ですな」と脅しをかける。前者について妻は、夫が世話をしている書生を探すために探しに行ったためであるとするが、後者には困惑する。

この疑惑は、夫が刑事によって拘引された後でやってきた学生の「明さまに云へば先生とある婦人との関係が日頃のお言葉とちがふ」という発言によって裏打ちされる。妻は夫の「潔白」を明らかにしようとして外出しようとするも、婆やに止められるところで第二場

は幕を閉じる。この第二場では、妻が自分は夫に愛されていないのではないか、夫は別の女性と関係を持っているのではないかという疑いが、（特高）刑事という人物に象徴されていると言える。

続く第三場では、「俺れはいまにお前に凡てを告白しなければならない時が来るだらう」と第二場で夫が予告した通り、彼は次のように自身の内面を告白する。

妻。――たつた一つ……一つだけ伺つておきたい事があるの。

夫。――何んだい。

妻。――私、私は……あなたを信じ切つてゐてよう御座いますか。

夫。――（男らしく）いゝとも。俺れはこの一言をはつきりお前に云ふ事が出来るために、他人が知らない程俺れの迷ひ易い心と戦つて来た。而して俺れは幸ひにも勝ちぬいた。俺れはそれを自分ながらいさぎよく思ふんだ。安心して俺れを信じ切つていゝよ。俺れもお前を心の底から愛する事が出来るのをありがたく思ふ。（涙して）俺れたち二人は本当に幸だつた。

妻。――うれしう御座います。もう……もういつ死んでもいゝ。

夫。――さうだ。お前はそこで生きてるより俺れの心の中で余計生きてゐる。俺れの心はお前を吸ひ取つてしまつたんだとさへ思へる。然し今お前を失ふのは――俺れがやつとお前の夫らしくなつた時にお前を失ふのは苦しいからな、出来るならなほつてくれ、いゝかい。（妻うなづく）俺れの血管の中にはお前が想像も出来ない程の毒血が流れてゐるんだ。結婚してからもいくたりの女に誘惑を感じたか知れなかつた。ある時は運命がお前以外の女に俺れを結び附けてるなと思つた事さへあつた。然し俺れはそのたんびにたつた一人でお前にさへも打明けられない戦をたゝかつたんだ。而して血みどろになりながらも一つ〳〵勝ちぬけて来た。一つ勝つたんびにお前の俺れに対する愛と、俺れのお前に対する愛とがはつきりわかり出して、夫れが力に変つて来たんだ。A子、俺れは俺れたちの淋しい道を悔いないよ。わかるか。俺れたち二人は無駄には生きなかつた。一つの力となつて生きて来たんだ。わかるね。（妻うなづく）是れは俺れたちが感謝すべき事だ。誇るべき事だ。謙遜な心で誇るべき事だ。

妻。――もうほんとに天国もいりません。ほんとにうれしくつて涙がこぼれます。私は死んでも、もつと生きてますのね。

夫は、妻以外の女性にも心を惹かれつつも妻への愛を保ってきたことを告白し、妻はそれに感謝する。この場面は戯曲のちょうど中盤に位置しており、第一場で提示、第二場で展開された妻の疑念が解決し、彼女の寿命が尽きる前に二人の愛が確認されるというクライマックスとなっている。グスターフ・フライターク[24]は演劇を、

発端・上昇・頂点・降下（転向）・段落の五段階に分けているが、この場面はまさに、演劇の「頂点」に当たるものである。そして、第四場（夢の場）では妻の「あなたはこんな何一つとりえのないものをよく愛して下さいました」という遺書が読まれて二人の愛が再度確認された後、妻が夫から引き離されて「降下」し、第五場で死を迎えるという「段落」に向かっている。

このような戯曲の構造のレヴェルにおいて、夫婦の「死」さえ越えさせる「愛」の力」[25]（安川定男）が、「死と其前後」の主題となっていることは明らかである。「死」という「運命」の中で愛を確認するという筋は、前節で述べたようなメーテルリンク受容と大きく重なるものである。加えて、「死と其前後」の現実と夢とが平行して展開される筋、擬人化された「死」や「影人」といった象徴的な表現がなされていることも、メーテルリンクの象徴主義的な演劇を想起させる要素である。

このような「死と其前後」の筋や演出から、メーテルリンクや『アグラヴェーヌとセリセット』が想起され、当時、前節で述べたような受容がなされていたからこそ、夫婦の愛の勝利として評価されたのではないだろうか。逆に、神秘主義的に人間の内面を直感できるとする「戯曲」というカセットから取り出して見ると、「硬化した愛の概念」という江口渙の冷ややかな感想も生まれることになるのだろう。それゆえ、メーテルリンクの戯曲という「カセット」は大きな役割を果たしていると言えるのである。

三　本当に愛は勝ったのか

しかし、「死と其前後」は単に夫婦の「愛の勝利」を謳歌するだけのテクストではない。そのような「勝利」を突き崩すような要素が、この戯曲の随所に現れているのである。もちろん筆者は、夫婦の愛を表現しきれていないために失敗であるとする江口渙以下の批判に連なるものではなく、愛を相対化する表現を評価しようとする立場にある。前述の井上理恵は、序幕で病院の院長が翌朝八時に来ると予告されたのに対し、第一場の午後一〇時の時点で医師が現れることについて、「プロローグの伏線の意義が消え、張り詰めていた緊張が弛緩する」[26]として「構成の欠陥」を批判している。しかし、来ないのは「院長」であり（来たのは「医師」であった）、この点で井上はテクストを誤読しているが、どちらであれ医者が来てしまったことをもって「破綻」とするのは当たらないだろう。むしろ、この後でも繰り返される、コミュニケーションの不全、人物の間の行き違いを予告していると言えるのではないか。

戯曲の全篇を通して、夫婦と、彼らの世話をする婆やや看護婦とのやりとりは噛み合っていない。例えば、第一場で夫が看護婦に、八百屋から林檎を持って来させるように依頼する。看護婦は遅いからという独断で翌朝まで連絡せず、林檎が届くのは妻の死後になってしまう。あるいは第三場で、次の引用文のように夫が婆やに湯を沸かすように指示するも、婆やはその仕事をせずに看護婦と一緒に主人への愚痴をこぼしている。なお、婆やの台詞の「天気」という

のは暑いという物理的な天気と、夫の機嫌をかけたものと思われる。

看。――婆やさん、お前さんお隣に行つて林檎の事を頼んで下さいな。

婆。――いやだよ、それはお前さんが頼まれたことぢやないか。（病室の方を見やりながら親指を出して）お天気が悪いだらう。

看。――いやになつちまふよ。

婆。――これ（小指を示し）さへよければ、そんなんでもないんだけれども、わるいとなるとやつあたりだからねえ。どうだらう。

看。――もう駄目よ、かあいさうに。

婆。――さうかねえ。そりや何んにしてもお気の毒な事だねえ。

看。――それぢや私ちよつと行つて来ますからね。

このような現実での不和を反映するように、夢の場（第四場）でも婆やは言いつけを守っていない。さらには、クリスチャンである婆やがことあるごとに「神様」を持ち出し、夫を不快にさせている。夫が機嫌を悪くしているのは八つ当たり以外にも、婆やの態度にも原因があるだろう。婆や看護婦の人物設定について、和辻哲郎は「愛のない冷たさを、鋭く描く」ことによって「愛を主題とするこの作に極めて効果の多いものであった」[27]と評価している。また江頭太助は、婆やがクリスチャンであることによって「愛のあり方についてキリスト教との対決を巧まずに表現する結果」[28]となったと述べ、この夫婦の愛が『惜みなく愛は奪ふ』の愛に繋がる「利己的ならぬ愛」であるとしている。確かに、婆やは「神を信ずるものは幸いなり」と申しますが」と言ったり、「ありふれたる賛美歌」を鼻歌にするなど、表面的にキリスト教の道徳を守る人物として、教会を退会した夫と対置されていることは明らかである。このような対置は『宣言』のAと教会を退会したB、『或る女』の葉子と俗物的クリスチャン達という、有島の他の作品にも共通する構図である。

しかし、一見夫婦の愛の勝利に対置されている看護婦や婆やとのコミュニケーションの不全が露呈されているからこそ、「夫婦の間がしっくりいかなかったときの姿」[29]という佐々木さよによる指摘のように、夫婦の愛を相対化し、愛を確認し合った筈の夫婦の間にも行き違いが残ったままなのではないかという回路を生じさせているのではないだろうか。

前節で引用したように、死に瀕した妻は夫からの愛を確認しようとする。それに対して、夫は妻への愛を告白するが、その愛の背景には他の女性への誘惑を感じてきたという過剰なまでの内面の吐露を伴ってしまう。これにより妻の死後、夫が妻以外の女性を関係を持つ可能性をも示されることになる。確かに妻は「虚言」のないコミュニケーションを求めていたが、それは夫が妻を愛しているという言葉であって、過去の内面の告白までも求めてはいない筈である。このずれこそが、戯曲中の最大のコミュニケーションの不全なので

はないだろうか。

四　愛の不可能性

では、他の女性に誘惑を感じてきたという夫の造型について、詳しくみてみよう。前述の神近市子は、他の女性への誘惑を払いのけて一夫一婦を守ろうとした夫の苦闘を絶賛した。皮肉にも、後年の有島は「自己の要求」（『改造』大一〇・一）などの文章で、同時に複数の人物に恋愛するという、「恋愛の多角性」を主張していた。さらに、その最晩年「私の妻を迎へぬ理由」（『婦人画報』大一二・四）で有島は、妻の死に関連して「恋愛の多角性」について言及している。この談話記事で有島は、自分が再婚しないのは、「亡くなつた妻の深いメモリーが原因」ではなく、「愛に於て自由であるべき」だからとし、さらに自分を「多くの女性を同時に愛し得る男性」だと述べている。以上の「恋愛の多角性」の主張は、「死と其前後」よりもかなり後のものではあるが、「結婚してからもいくたりの女に誘惑を感じたか知れなかつた」という夫の台詞に、その萌芽を見てとることができる。

ただし、このような恋愛に対する問題意識は有島に限ったものではなかった。筆者は以前、大正期の恋愛論が一対一に収まらない恋愛の実態と、永続的一夫一婦制の間の矛盾をどう埋めるかが大きなトピックであり、有島の「恋愛の多角性」もそのような背景の中で唱えられたものであることを論じた[30]。先の神近の「死と其前後」評は、恋愛論が流行した時期よりも少し前のものではあるが、彼女自身が大杉栄を中心とした多角的な恋愛関係の当事者であったからこそ、この問題に大きな問題意識を持っていたのだろう。

このような同時代の問題意識も踏まえると、夫婦の「愛の勝利」は一層疑わしいものになる。「愛の勝利」が、互いの排他的（つまり、一対一の愛）を相互に確認すること、とするならば、仮に妻が夫が願うように病から恢復した時、このような愛の勝利を持続することは可能なのだろうか。結婚後も複数の女性に誘惑を感じ、「運命がお前以外の女に俺れを結び」つけていると感じたとまで告白する夫が、妻と一対一の関係を持続することは難しいだろう。

ここで、戯曲の序幕と終幕の擬人化された「死」の台詞を引用しよう。

死。――また一つの命に永劫開く事のない錠前（かぎがね）をかける時が来た。錠前はいゝか。鍵はよくあふか。錠前も鍵も鏽びてはゐないか。その用意をして置けよ。（序幕）

「死（ママ）」。――小さい焔はみじめにもたやすく消え果てた。錠前はたしかにかけたな。金輪際錠前の外れるやうな事があつてはならないぞ。（終幕）

序幕で予告されたように、終幕で妻の命の焔に「錠前」がかけられることで事態は不可逆な状態に固定される。しかし、ここで固定されたのは妻の寿命だけにとどまらず、夫婦の関係も含まれているのではないだろうか。妻が死ぬことによって、この夫婦は永劫に別れることのない夫婦となることができたのである。それゆえ、愛が死に対して勝利したのではなく、二人を一組の夫婦として縛着するには妻の死が必要不可欠だったのである[31]。

このように「死と其前後」は、運命や死に翻弄される人間を直感的に描いたとするメーテルリンク受容によって、死に対する夫婦の「愛の勝利」として読み取ることができる一方、そのようなイメージを逆手に取り、コミュニケーションの不全などの描写によって愛の不可能性を露呈するテクストとして評価できる。

ところで、有島は『惜みなく愛は奪ふ』（大九・六）を始めとする評論の中で自己と他者の接続・同化を唱えた一方、その晩年には「宣言一つ」（『改造』大一一・一）や「文化の末路」（『泉』大一二・一）などでそのような認識を自己批判するに至っている。前述のメーテルリンク受容において武者小路実篤は、他者と同化しうるような「生長」の認識を得た一方、有島はメーテルリンクを想起させる戯曲「死と其前後」で愛の勝利を描きつつも、同時にその不可能性を露呈していることは、自他の断絶を意識するようになった晩年に至る思想の変遷を予見させるものである。中村三春は「有島の小説テクストこそは、何よりも他者と自己にまつわる分裂・係争を前景化」[32]していると述べているが、この戯曲もまた、夫婦の愛の可能性と不可能性を中心に、そのような問題系を前景化する小説群に組み入れることができるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、有島武郎の戯曲「死と其前後」について、同時代のメーテルリンク受容を踏まえながら、夫婦の愛を中心に分析を行った。当時のメーテルリンク受容においては、戯曲というジャンルが、運命や死に翻弄される人間の内部を直感的に表現したものであるとされ、とりわけメーテルリンクが『アグラヴェーヌとセリセット』などでそれを実現したと捉えられていたが、その内実までは深く語られることはなく、外国の戯曲という「カセット効果」的なものであった。そのような受容の中で有島の「死と其前後」は、死に対する夫婦の愛の勝利、として同時代では理解された。

確かに、夫婦が互いの愛を確認する場面はクライマックスに位置しており、戯曲の構造からも夫婦の愛が主題となっていることは明らかである。その一方で有島は、夫婦と彼らを世話する婆や看護婦とのコミュニケーションの不全や、妻以外の女性に誘惑を感じていたと過剰なまでに内面を告白する夫という人物の造型により、前述のような愛が、むしろ実現不可能であることを露呈させたのであった。このように「死と其前後」は、メーテルリンクの季節という「カセット」を利用して愛の勝利を演出しつつ、その不可能性を露呈するという特徴を持っているのである。

また、前述の夫の造型は後年の有島の「恋愛の多角性」の萌芽であり、他の有島の文芸テクストにおける恋愛の多角性の問題や、その小説に比べて研究が充実しているとは言い難い戯曲に関しても引き続き研究を進めたい。

（なかむら　たける・人文学専攻）

〈附記〉

引用文中、歴史的仮名遣は原文のままとし、旧字体は新字体に改めた。また、「ヱ」に濁点が付いた文字はフォントの都合上、「ヴェ」に直した。引用した有島武郎のテクストは筑摩書房版『有島武郎全集』全一五巻別巻一（昭五四・一一～昭六三・六）に拠った。本稿は日本比較文学会二〇二二年度第一回北海道研究会（令和四年七月九日、オンライン）における口頭発表を元にしている。学会にてコメントを下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

注

1 この上演に関する研究としては、井上理恵「演劇革命と有島武郎」（『国文学　解釈と教材の研究』平一五・六）がある。

2 劇団「ずるむけ般若」によって令和元年一二月一四日～一五日、遊空間がざびぃ（東京都杉並区）にて上演された。

3 竹越幸夫（「『死と其（ママ）の前後論』」、安川定男・上杉省和（編）『作品論　有島武郎』昭五六・六、双文社）および西垣勤（「『死と其前後』論」、有島武郎研究会（編）『有島武郎研究叢書第一集　有島武郎の作品（上）』平七・五、右文書院）は札幌時代の有島の「自己弁解」やあるべき姿への「願望」としてこの戯曲を読んでいる。

4 この他、著者自身による言及としては、「自分の劇の稽古を見て」（『時事新報』大七・一〇・四）、「『死と其（ママ）の前後』」（『中外新論』大七・一一）がある。

5 その他の観点からの研究としては親子の関係の観点から論じた、村田裕和「托卵の思想――有島武郎「死と其前後」から秋田雨雀「幼児の殺戮時代」まで」（『有島武郎研究』二三、令二・五）がある。

6 菊田茂男「メーテルリンク」（福田光治・剣持武彦・小玉晃一（編）比較文学シリーズ欧米作家と日本近代文学第三巻『ロシア・北欧・南欧篇』、昭五一・一、教育出版センター）。

7 今村忠純「メーテルリンクの季節　直哉、実篤、透谷、虚子、鷗外」（鈴木貞美（編）『大正生命主義と現代』平七・三、河出書房新社）。

8 長與善郎『わが心の遍歴』（昭三八・七、筑摩書房）、一一九頁。

9 秋田雨雀「序」（『アグラヴェヌとセリセット』大三・一一、金桜堂書店）、九頁。

10 厨川白村『近代文学十講』（第四版、大四・四、大日本図書）、五二二頁。

11 本間久雄『男女三角関係物語』（大一〇・七、新潮社）、九頁。

12 楠山正雄『近代劇十二講』（大一一・八、新潮社）、四八二頁。

13 池内輝雄（「白樺」――武者小路実篤と志賀直哉――」、鈴木貞美（編）『国文学解釈と鑑賞　別冊　「生命」で読む二〇世紀日本文芸』平八・二、至文堂）によれば、志賀直哉や柳宗悦はメーテルリンク受容によって「人の無意識という神秘的な領域」（一五四頁）を題材化したという。

14 柳父章『翻訳とはなにか』（昭五一・八、法政大学出版局）、二五頁。

15 越智治雄「大正期の戯曲――その出発点の素描――」（『明治大正の劇文学』昭四六・九、塙書房）、二六〇頁。

16 神近市子「勝利の恋愛」（『人間社会』一、大六・八、『初期社会主義研

究』一五、平一四・一二）、二〇一頁。

17 和辻哲郎「今年の創作界に就て（有島氏の「死とその（ママ）前後」及び志賀氏の「和解」）」（『黒潮』大六・一二）、一三六頁。

18 藤沢清造「『誘惑』と『死と其の（ママ）前後』――芸術座研究劇――」（『演芸画報』大七・一一）、八〇頁。

19 永平和雄「白樺派の劇作家――人間探究の文学・武者小路と有島の間」（『近代戯曲の世界』昭四七・三、東京大学出版会）。

20 藤木宏幸「有島武郎の戯曲」（瀬沼茂樹・本多秋五（編）『有島武郎研究』昭四七・一一、右文書院）。

21 江口渙「有島武郎論」（『文章世界』大七・四、『有島武郎全集』別巻）、四八三頁。

22 井上理恵「境界のドラマ　有島武郎の戯曲」（『近代演劇の扉をあけるドラマトゥルギーの社会学』平一一・一二、社会評論社）、一一九頁。

23 佐々木さよ「観想録」『松むし』から見た『死と其前後』」（『国文学解釈と鑑賞』平一九・六）、一七九頁。

24 グスターフ・フライターク『戯曲の技巧』（一九二二、島村民蔵訳、昭二四・五、岩波文庫）、上巻、一三四頁。

25 安川定男『悲劇の知識人　有島武郎』（昭五八・一、新典社）、一一一頁。

26 井上理恵前掲論文、一一六頁。

27 和辻哲郎前掲論文、一四〇頁。

28 江頭太助「初稿成立の背景とその位相」（『有島武郎の研究』平四・六、朝文社）、一五〇頁。

29 佐々木さよ前掲論文、一七九頁。

30 中村建「大正後期恋愛論における有島武郎の位置――「恋愛の多角性」の問題を巡って――」（『国語国文研究』一五八、令四・二）。

31 なお、テクストの解釈と作者の伝記的事実とを混同してはならないが、妻の死の直後に書かれた私小説または随筆的な文章「平凡人の手紙」（『新潮』大六・七）で「妻を失つてもその為めに悶死したり再婚などは思ひもよらないと思ふ程不幸ではない。是れは多分死と云ふ奴が万事の形をつけてくれると高を括る平凡な見方から出てゐるに違ひない」と述べた後、キリスト教徒ほど配偶者の死後「再婚を手取早くする」が、あの世では一夫一婦の関係はどうなるのかと揶揄している。

32 中村三春「係争する文化　「文化の末路」と有島武郎の後期評論」（『新編　言葉の意志――有島武郎と芸術史的転回』平二三・二、ひつじ書房）、七五頁。